編集雑記

お気付きのように、表紙のデザインが新しくなりました。本誌も通算十号を越えたので、その記念に、新しい装いになったという次第です。書家の小川まさえさんが甲骨文字の「聖」を書き下ろしてくださり、それを核にして創作なさったものです。白川静氏によりますと、「聖とは、神の声を聞きうるもの」「風のおとずれによっても神霊を覚知するもの」だそうです。そんなすばらしい文字に受け止めて、われわれは聖書とか聖霊と言い表してきたのだ、と思いを新たにします。当初五点のデザイン候補があったのですが、事務局の若い研究者達が中心になって、選考を進めてくれました。一方これまでの十年、創刊号から第十号まで『パトリスティカ』の顔として親しまれてきた「三位一体」。その作者、田坂好生さんに厚く御礼申し上げます。

本誌の編集方針についてひとつお知らせがあります。第十二号から、日本語『パトリスティカ』に掲載する論文の採否は、レフェリー制によって判定されます。学会誌に掲載された論文にたいし、レフェリー制を通っているかどうかで評価する傾向が強くなっているためです。詳しくは同封の新会則をご覧下さい。

本年四月から編集幹事は田子多津子さんになりました。東横線沿線に都立大学があった時代からの会

員ですから、ご存知の方も多いと思います。アレクサンドリアのフィロンや新プラトン主義の地道な研究を続けておられます。最近野町啓先生と共訳で、フィロン『世界の創造』(*De opificio mundi*) の全訳に、註釈を付して公刊なさいました。日本のフィロン研究が立ち遅れている現況に照らし、疑いなく貴重な一石であろうと思います。

今号に収録された論文は、それぞれ研究例会での口頭発表と討論を土台にして、原稿を準備していただいたものです。しかしロバート・C・ヒル先生の論文については一言補足する必要があります。ヒル先生 (Dr. Robert Charles Hill) は二〇〇六年六月の研究会において、会設立三十周年記念特別講義として、「旧約註解者ヨアンネス・クリュソストモス」と題する話をしてくださったのですが、オーストラリアに帰国後程なく、不帰の旅路に就かれました。そのため、研究会での発表原稿をそのまま翻訳し、掲載させていただくことに致しました。来日なさった当時には思いもよらなかった経過となりましたが、薬石効なく、病状は急速に進行したと伺っております。しかしヨアンネスとアンティオキア教父達の御翻訳は、三十冊以上の刊行点数を数えます。その考え抜かれた流麗な英語訳は、われわれにとってもヒル先生のお名前を永く忘れ難いものにすることと信じます。はからずも今回はシリアの新プラトン主義にたいする研究が寄せられ、われわれの視野が然るべき方面へと拡げられてゆくことに、興趣を覚えたことです。

(有)